

機関番号： 14401
 研究種目： 基盤研究 (B)
 研究期間： 2008～2010
 課題番号： 20310156
 研究課題名 (和文) 20 世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究—アジアにおける戦争とディアスポラの記憶
 研究課題名 (英文)
 Research on Women Artists and Visual Representation in 20th century: Memory of the War and Diaspora in Asia
 研究代表者 北原 恵 (KITAHARA Megumi)
 大阪大学・文学研究科・准教授
 研究者番号： 30340904

研究成果の概要 (和文)：

本プロジェクトは、美術 (史) で周縁化されてきた女性アーティストに焦点を絞り、海外・日本におけるジェンダーの視点からの美術史研究や、表象文化理論とアート実践の調査を行い、特にアジア太平洋戦争期の女性美術家の活動を実証的に跡付けることによって、戦争や暴力、ディアスポラに関わる表象・アートを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

The project focuses on women artists who have been marginalized in the Art History. We make a research on art history in Japan and oversea, and the theory of representation and culture, and artistic activities from the gender perspective. Especially tracing the actual activities by women artists during the war period of 1931-45 in Japan, we clarified the visual representation around the war, violence and diaspora.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2009 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2010 年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
年度			
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード： 表象、美術、戦争、記憶、ディアスポラ、女性、メディア、

1. 研究開始当初の背景

ジェンダーの視点からの視覚表象や美術表現の研究状況について概観しておこう。

(1) 研究プロジェクト

日本で視覚表象や美術のジェンダーの視点からの研究が本格化したのは、他領域のジェ

ンダー研究に比べると決して早くない。1990年代半ばから美術史研究者や学芸員を中心として運営されてきた「イメージ&ジェンダー研究会」や、お茶の水女子大学における COE プロジェクト「理論構築と文化表象」(天野知香・竹村和子ら)の活動、また日本女性学学会、女性学研究会、美術史学会、美学会、

表象文化論学会、ジェンダー史学会などにおける個別発表などが挙げられるだろう。本研究代表者と分担者を含む4人もこれらの研究活動に長年関わってきた。

(2) 学術論文

1990年代から急速に進展した美術や映画を含めた視覚芸術をジェンダーの視点から読み解く研究は、その後多数の著作・論集が出版されるなどかなりの蓄積がある。たとえば、鈴木杜幾子・馬淵明子・千野香織らが編集した論集『美術とジェンダー』(1997年)と続編『交差する視線』(2000年)、斎藤綾子編『映画と身体/性』(2006年)、若桑みどり『象徴としての女性像』(2000年)、香川檀・小勝禮子『記憶の網目をたぐる』(2007年)、池田忍・小林緑編『視覚表象と音楽』(2010年)などの研究に見られるように、従来の美術史や映画史、音楽史を見直し、同時代の女性芸術家を発掘・紹介する著作が多数出版された。植民地や銃後で果たした女性芸術家の役割に関する研究については、第二次世界大戦下の視覚的プロパガンダの図像分析を行った若桑みどり『戦争がつくる女性像』(1995年)を先駆として、若手研究者があとに続いてきた。このように、ジェンダー表象の研究においては、美術史学に限らず、映画や文学、社会学など領域を超えた研究者が多く登場している。さらに、1990年代末からさかんになった韓国(梨花女子大学のジェンダー/美術研究者や学芸員・アーティスト)との国際交流は継続し、戦前の朝鮮植民地下の美術研究(金恵信『韓国近代美術研究』2005年)や、在日コリアンの研究者を中心にディアスポラの視点が導入されるなど、研究の視野はさらに深化し広がっている。

(3) 展覧会

ミュージアムの現場でも1990年代に入ると、ジェンダーの視点を導入した展覧会が公立美術館で行われるようになり(東京都写真美術館・笠原美智子、栃木県立美術館・小勝禮子ら)、大きな議論を呼んだ。本科研の分担者・小勝禮子が企画した「奔る女たち——女性画家の戦前・戦後」展(2001年)と「前衛の女性 1950-1975」(2005年)は、1930年代から1970年代までの歴史のなかに埋もれていた女性画家の作品や資料を発掘・調査し、日本近代の女性美術家研究を大きく進展させる端緒となった展覧会である。

2. 研究の目的

(1) 海外における視覚表象/ジェンダー研究の現状とアートの包括的調査

東アジア(韓国・中国・台湾・フィリピン・インド)を中心に、現地の学芸員・研究者・アーティストへの聞き取り調査を深め、東アジアの視覚表象とジェンダーについて考察する。

(2) 戦前/戦後期、日本の女性アーティストの基礎的研究の発展

本研究は、まず、アジア・太平洋戦争をはさんだ戦前/戦後期の女性アーティストについて、遺族や関係者から聞き取りや文献調査と、文献にも残されていない1次資料(作家の手紙やメモ、スケッチなど)の調査から始まる。女性画家に関する文献の不在が女性画家の不可視性と美術制度のジェンダーバイヤスを象徴しているように、基礎的資料のさらなる蓄積は火急的課題である。

さらに80年代以降、現代の女性アーティストには、「前衛」概念、および社会・歴史認識、ジェンダーの意識はどのように変容して伝えられたか、また継承されなかったか、アジア諸国や欧米の現代女性アーティストとの調査と平行して、日本の現代女性アーティストの作品を調査・分析する。

(3) 美術における戦争とディアスポラの記憶

東アジアにおける女性美術家の出現・活動とその背景、および女性表現者と日本の植民地支配をはじめとする「戦争」の記憶の表象や「前衛」運動の関与・影響を明ら

かにする（フィリピン、台湾、韓国、中国、タイなど）。日本の敗戦直後の占領期における「敗戦」の表象やドイツのナチズムやホロコースト、植民地支配などに関するミュージアム展示やアート表現に関する調査、世界中に離散するコリアン・ディアスポラの女性芸術家の調査など、人々の戦争の記憶の変容をジェンダーの視点から美術を中心に探る。

3. 研究の方法

(1) 大学研究者・美術館の連携

本科研では、大学での研究者だけでなく、小勝をはじめ、ジェンダー研究の立場から展示実践や研究を行ってきた多数の学芸員が国内外を問わず、協力者として多数参加している。神戸市立小磯記念美術館の「亀高文子」展では、神戸市立小磯記念美術館の辻智美学芸員の協力を得て、2009年9月、美術館の企画展と連動させた特別研究会「阪神文化圏における女性芸術家と近代美術教育」を開催し、小川知子（大阪市近代美術館建設準備室）と山崎明子（奈良女子大学）が発表した。福岡アジア美術館では、同館のラワンチャイクン寿子の協力を得て、2009年11月、特別研究会「現代アジアにおける女性のアート（バングラデシュ、中国）」を開催し、五十嵐理奈（福岡アジア美術館）と石田留美子（東京都写真美術館）が発表した。このように、ジェンダーの視点から、ミュージアムの現場と大学とのコラボレーションの場を継続して創り上げている例はほとんどなく、本科研の大きな意義と方法である。

(2) 国内外の研究調査

また、国内外の研究調査も進めることができた。主な海外調査としては、①韓国の美術家ユン・ソクナムらについての継続的調査（2011年1月の来日招待講演に結実）をはじめ、②ドイツ・フランスに移民し作品制作を続ける韓国系、日系女性美術家の調査、③台

湾、中国、ベトナム、オーストラリアでは、アーティストや研究者と面談することによって、新しい研究ネットワークの形成に尽力した。主な国内調査としては、①1930年代から活躍した「日本」の女性アーティストに関する聞き取り・文献などによる基礎的研究（長谷川春子、赤松俊子、田部光子ら）をはじめ、②本科研プロジェクト期間中に開催されたジェンダー&戦争関連の展覧会調査、などがある。田部光子の聞き取り調査は、「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」と協力して行った。

(3) シンポジウム&研究会の開催

シンポジウムや研究会も継続して開催することができた。大規模なシンポジウムとしては、①初年度2008年12月に武蔵大学で開催した国際シンポジウム「ジェンダー研究とアートの現状——「グローバリズム」再考」と、②最終年度2010年7月に大阪大学で開催したシンポジウム「視覚メディアに描かれた「日本」／「アジア」女性の身体」がある。

2008年度の「ジェンダー研究とアートの現状——「グローバリズム」再考」では、第一部「世界の諸地域のジェンダー研究とアートの現状」で、石田留美子・黒田加奈子・新保淳乃・福岡加容・中嶋泉・金恵信らイメージ&ジェンダー研究会会員が発表をし、第二部「アジアの諸地域のジェンダー研究とアートの現状」で、ソンプーン・ロードブン（タイ、チェンマイ大学）とジョン・ヘスク（韓国、梨花女子大学）が、ラワンチャイクン寿子（福岡アジア美術館）とともに報告し、イトー・ターリのパフォーマンスから始まった第三部「戦争・記憶とアート」では、中西美穂、小勝禮子、坂本知壽子（韓国、延世大学大学院）の発表。その後、リサ・ヨネヤマ（米国、カリフォルニア大学サンディエゴ校）と

ともに議論を行った。(韓国語通訳は金恵信、英語通訳はレベッカ・ジェニスン。『イメージ&ジェンダー』8&10号を参照)

2010年度のシンポジウム「視覚メディアに描かれた「日本」／「アジア」女性の身体」では、高みか(英国、シェフィールド大学)、チョン・ユジン(大阪大学大学院)、表智之(京都国際マンガミュージアム)、坂本知壽子、金恵信、児島薫(実践女子大学)が、7月23日-24日の二日間に渡って発表を行い、平田由美(大阪大学)と堀ひかり(米国、コロンビア大学)のディスカッサントとともに議論した。(同シンポジウムについては青弓社から出版予定)

4. 研究成果

年度別に成果をまとめると以下ようになる。

○2008年度

初年度は、①海外における視覚表象／ジェンダー研究の現状とアートの包括的調査(韓国・ドイツ)、②日本の戦前・戦後における女性美術家の調査研究(横須賀美術館・芥川紗織展、豊田市美術館「Dissonances-不協和音」展、東京都写真美術館・やなぎみわ展、目黒区美術館・石内都展ほか)、③国際シンポジウム開催(12月武蔵大)、④研究会開催(阪大)、⑤関連学会・研究会への参加、⑥基本文献・資料の収集、などを行った。

○2009年度

2年目は、①海外の学芸員・研究者・アーティストとの面談・調査(韓国・ドイツ・フランス・中国・台湾)、②日本の戦前・戦後における女性美術家の調査研究(群馬県立近代美術館・大川美術館「石内都展」、豊田市美術館「近代の東アジアイメージ」展、神戸市立小磯記念美術館「亀高文子」展、東京都

庭園美術館「ステッチ・バイ・ステッチ」展、東京都現代美術館「レベッカ・ホルン」展、越後妻有トリエンナーレほか、福岡アジア美術館「第4回福岡アジア美術トリエンナーレ」展)、③公開研究会開催、④国際シンポジウム参加、⑤関連学会・研究会への参加、⑥基本文献・資料の収集、などを行ない、資料の蓄積と国内外の研究者・アーティストとの交流を通じて、ネットワークを形成するなど大きな成果を得た。

○2010年度

3年目の最終年度は、①シンポジウム「視覚メディアに描かれた「日本」／「アジア」女性の身体」(阪大)の開催、②ユン・ソクナム講演会及び、韓国民衆美術と女性美術家に関する公開研究会開催、③海外の学芸員・研究者・アーティストとの面談・調査(韓国・ドイツ・オーストラリア)、④戦前戦後日本の女性美術家の調査研究・発表(長谷川春子・田部光子関係)、⑤美術展覧会調査、⑥国際シンポジウムでの発表(韓国)、⑦関連学会・研究会への参加・発表(沖縄県立博物館・美術館、福岡アジア美術館、女子美術大学)、⑧国際美術展における女性美術家調査(瀬戸内芸術祭、光州ビエンナーレほか)、⑨文献・資料の収集、などを行なった。①のシンポジウムの成果については、出版を準備中であり、国際シンポジウムなどでの発表も出版された。また、最終年度は、アートと社会をつなぐために、韓国の女性美術家の先駆者であるユン・ソクナム氏を招聘し、連続講演会を行っただけでなく、イトー・ターリ氏のパフォーマンス公演と組み合わせ、ジェンダーと美術の研究成果を広く普及することに努めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

①北原恵「Inner Voices—内なる声」展——境界から、境界へ響く”アジア”の”女”の声『インパクション』181号、インパクト出版会、査読無、pp.144-148.

②小勝禮子「戦時下の日本の女性画家は何を描いたか——長谷川春子を中心として」『現代美術史研究』28号、現代美術史学会(韓国)2010年12月、査読有、p.231-277.

③北原恵「〈慰安婦〉の表象と戦争体験——古沢岩美の場合」『現代美術史研究』28号、現代美術史学会(韓国)2010年12月、pp.153-193(「〈위안부〉의 표상과 전쟁 체험」『현대미술사연구』현대미술사학회)査読有

④香川檀「空間の経験と〈場〉の記憶——レベッカ・ホルンの〈独身者の機械〉」、日本ドイツ学会編『ドイツ研究』第44号、56-66頁、2010年、査読有

⑤北原恵「古沢岩美の描いた〈慰安婦〉—戦争・敗戦体験と主体の再構築」『インパクション』169号、2009年6月、pp.122-133. 査読無

⑥北原恵「変貌する中国現代美術—女性アーティストの現場を訪ねて」『インパクション』171号、2009年10月、pp.124-133. 査読無

⑦小勝禮子「フィリピンの女性とアート、『トラウマの中断』展をめぐって」『美術運動史研究会ニュース』102号、2009年、pp.7-15. 査読無

⑧香川檀「越境する記憶——現代アートの日独比較から」、高麗大学校日本研究センター『2009年度国際学術シンポジウム「グローバル時代の外国研究と自国研究」報告書』2009年、査読無

⑨北原恵「《御前会議》の表象——『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」甲南大学文

学部社会科学『甲南大学紀要・文学編』151巻、2008年3月、pp.23-52. 査読有

⑩小勝禮子「田部光子試論—『前衛(九州派)』を越えて」『美術運動史研究会ニュース』No.93、2008年5月、pp.1-12、査読無

〔学会発表〕(計9件)

①北原恵 招待講演「戦争と文化——戦時下における天皇表象と日本美術」高麗大学 KIEP(対外政策研究院) & CSIS(国際大学院)主催、於・高麗大学2011年5月13日

②小勝禮子報告「イノセンス展についての報告」、「アール・ブリュット・ジャポネ凱旋展」ギャラリートーク「近年、美術館で起きている出来事について」、主催：滋賀県社会福祉事業団、会場：大津プリンスホテル コンベンションホール、2011年2月4日

③北原恵 招待講演「〈慰安婦〉の表象と戦争体験」(学会“War and Gender in Korean and Japanese Art Histories”) The 11th International Symposium of Korean Association for History of Modern Art ソウル大学、2010年10月23日

④小勝禮子 招待講演「戦時下、日本の女性画家は何を描いたか」(学会“War and Gender in Korean and Japanese Art Histories”) The 11th International Symposium of Korean Association for History of Modern Art ソウル大学、2010年10月23日

⑤香川檀招待講演「ミュージアムとジェンダー；展示による経験の可視化をめぐって」日本学術会議史学分科会シンポジウム「歴史教育とジェンダー—教科書からサブカルチャーまで」2009年12月13日(於：日本学術会議)

⑥金恵信招待講演「植民地朝鮮」という表象空間—モダンガールと遊女のイメージが語

るもの」「近代の東アジアイメージ—日本近代美術はどうアジアを描いてきたか」展シンポジウム豊田市美術館、2009年11月27日

⑦香川檀 招待講演：「ドイツ美術における〈表現的〉伝統とジェンダー—表現主義の国民化・男性化・都市化をめぐる」フェリス女学院大学ジェンダー研究会、2009年2月29日、フェリス女学院大学

⑧金惠信 研究発表 ‘Discourse and Representations on the Kisaeng: An Analysis in Relation to the Cultural Policies of Colonial Korea.’ Colonization, City, Cultural Policies.” The 6th International Conference of Asian Society of Art in Taipei, 18, December 2008

〔図書〕(計10件)

①北原恵「『遠近を抱えて』の遠景と近景—戦後美術における天皇表象」『アート・検閲、そして天皇』沖縄県立美術館検閲抗議の会編、社会評論社、2011年、pp. 118-140.

②北原恵編『20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究』(科研報告書)全174頁、2011年

③金惠信「韓国近現代美術の女性作家」、『女子美術大学110周年記念シンポジウム「現代アジアの女性作家」報告集』、2011年、pp. 58-67

④小勝禮子「イノセンス(?)—いのちに向き合うアート」『イノセンス—いのちに向き合うアート展』図録、栃木県立美術館、2010年7月、pp. 8-15

⑤北原恵「元旦新聞にみる天皇一家像の形成」『性の分割線』(荻野美穂編：日本学叢書)青弓社、2009年、pp. 19-56. 査読有

⑥北原恵「現代アートとジェンダー」『ジェンダー・スタディーズ』(牟田和恵編)大阪大学出版会、2009年、pp. 44-64.

⑦香川檀「言説がつくりだす創造性の性差—

ドイツ表現主義と女性芸術論」『ドイツ近現代ジェンダー史入門』(姫岡とし子他編、青木書店)2009年、pp. 70-90

⑧香川檀「言説がつくりだす創造性の性差—ドイツ表現主義と女性芸術論」姫岡とし子／川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、2009年、

⑨金惠信『現代韓国美術における女性と表現—ユン・ソクナムの「作業」』中世日本研究所、2008年、全71頁。

⑩小勝禮子「歴史を貫く「女性の力」」『ユンソクナム個展』2008年、pp. 20-41.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北原 恵 (KITAHARA Megumi)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：30340904

(2) 研究分担者

小勝 禮子 (KOKATSU Reiko)
栃木県立美術館・学芸課・学芸課長
研究者番号：80370865

金 惠信 (KIM Hyesin)
大阪経済法科大学・アジア研究所・特別研究員
研究者番号：30448948

香川 檀 (KAGAWA Mayumi)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：10386352

(3) 連携研究者

レベッカ・ジェニソン (JENISSON Rebecca)
京都精華大学・人文学部・教授、
研究者番号：30141485
池田 忍 (IKEDA Shinobu)
千葉大学・文学研究科・教授
研究者番号：90272286